# ２０２４「ことばの森教室」第４回優秀作品紹介

## ＜中学校１年生＞　作文課題「根拠（理由）を明らかにして書く」

### １－①　「校則を見直すべきだと思う」

学校の校則について、色々思うことがある。私が小学生の時、衝撃的な光景を目にした。高校生だった兄が、丸坊主に近い髪型で帰ってきた。前日、美容院へ行ってきたばかりなのに、一体何が起きたのだろうと思った。家族全員が、唖然として理由を聞いた。兄が美容院の人にそうしてくれと言った訳ではないが、髪型がツーブロックのようになっていたようだ。しかしそれは、家族にも本人にも分からない程度だったようだ。けれど先生に、明日までに直してくるようにと言われ、困った兄は、その日の学校の帰り道、自分で美容院に行って坊主にするしかなかったという訳だ。

私も中学生になり、校則があるということを知った。髪がある長さにまでなったら、縛らなければいけない。ヘアゴムやカーディガンや靴下の色の指定、スカートや靴下の丈の長さの指定など、数ある校則によく理解できないものがある。小学生は校則がなくて自由、高校生は髪の毛を下ろしている人をよく見かける。

最低限のマナーは必要だと思うけれど、人間にはそれぞれ個性がある。だから先ほど述べたような校則はいらないと思う。まずは校則というものについて、生徒達で話し合う時間を作るべきだと思う。そして、髪の毛の色や髪質など、生まれながらに持っている特徴を申告したりすることは、人権の問題にも繋がると思うので改善していくべきだ。

### １－②　「『学びの場』での使用は・・・」

私達がよく使用している「スマートフォン」とても便利で使いやすい。でも、不便で危険なことも

ある。今では、中学生でも持っている人は少なくないだろう。

そんなスマホだが、学校に持ってくるのは果たしてどうなのだろうか。私は、控えるべきだと考えている。なぜなら、授業がしっかり受けられないからだ。学校は、「学びの場」だと考えている。その場が、スマホの影響でなくなってしまうかもしれない。また、今はどんなことも調べられる時代になってきている。だから、学校で学ぶ必要がなくなってしまう可能性が考えられる。さらに、将来に目を向けなくなってくるかもしれない。ネットで色々とできることで、将来のことについて深く自分で考える機会が減ってくるのではないかと思っている。

もしも、学校生活にスマホを持ってきたらどうなるだろう。私は、スマホなどを優先してしまい、優先順位が立てられなくなると思う。また、一つのことに集中して取り組めなくなると思う。これを学園祭などの行事で例えると、どうだろうか。アイデアなども全部スマホに頼ってしまい、達成感や楽しさ、嬉しさなどの「感情」を感じなくなってしまうことも、もしかしたら考えられる。

以上のことから、私は学校でスマホは控えるべきだと考える。スマホは便利だが、今の学校生活には必要ないのではないだろうか。自分の将来のためにも、優先順位をしっかり立て、スマホを使用することが大切だと思う。

## １－③　「もう、いやだ」

私は７年間バドミントンを続けています。しかし、時には練習がきつくてやめたいと思う時もありました。

私が５年生の時、コーチの言ったことを実行することができず、毎回のように怒られて、挫折し、お母さんに「もう嫌だ。」と言った。が、お母さんは「やめないで頑張れ」と言ってくれました。でもその時の私は、「全然自分の気持ちを分かってくれない」そう思っていました。６年生の時、試合

の時に５年生から負けていた相手に勝てて良かったです。私がここまで頑張れたのは、両親の応援があったからこそです。ここまで成長できたことを、両親に感謝しています。

また、やめたいと思ったのは５年生の時だけではありません。お姉ちゃんがまだいた３年生の時にも、習い事の後にバドミントンがあって、「行きたくない。」と言ってしまいました。でもその時にも、お母さんが支えてくれて、ずっと続けられたから助かりました。

私がどれだけやめそうになっても、お母さんやお父さんが支えてくれていると、改めて感じました。そして家族以外にもたくさんの人に支えられているから、バドミントンを７年間続けることができて、感謝しかありません。これからは「やめたい」等マイナスな発言はしないようにしたいから、自分の気持ちだけでなく、親の気持ちも考えられるようにしたいです。支えられていることに感謝を伝えるには、強くなることが大切だから頑張りたいです。

## １－④　「学校では制服？私服？」

学校生活では、私服より制服がいいと考える。

まず、制服の良さは一致団結できることだと思う。学校行事の学園祭や音楽発表会などで、全員が違う服を着ていたらどうだろう。見た目もバラバラになり、全員仲間意識が薄れ、協力する気が出なくなってしまうと感じる。次に、服のセンスなどでいじめが発生するかもしれない。カッコイイや似合っていると思って学校に行ったのに、友達に「ダサイ」と言われたら、自信喪失して学校に行けなくなってしまうかもしれない。その他にも、服装に悩まなくていい。悩みすぎて、遅刻をしてしまうことがあるかもしれない。

しかし、私服がいいという人もいるかもしれない。私服の良さは、選択がし易いことやその日の天気や気温で調整できるので、快適に過ごせる。確かに、制服は洗濯しにくいし、夏は暑くて快適に過ごせないこともある。その他には、多様性や個性を尊重できる。服を選ぶことで、「自分」という存

在を主張することができる。ただ、その服の印象によっては、友達と距離ができてしまう事態が起きてしまうかもしれない。自分とその人を区別でき、個性を尊重することができるという考えも理解できるが、学校生活とは仲間と生活するところなので、個性と団結を比べると、団結の方が大切なのではないかと考える。

つまり、服も心も団結できるという点から、学校生活の服は制服の方が良い。

## ＜中学校２年生＞　作文課題「今頑張っていること」

### ２－①　「無題」

私の家は、山の中にある。コンビニまで行くのに車で約２０分。往復だと、４０分だ。ものが簡単に手に入ってしまうこの時代、私は徒歩でコンビニやスーパーマーケットに行くことができないため、市販のものに頼ることが少ない。

「サンドイッチが良い」小学生の頃の私は、サンドイッチが大好きで、ことある事にサンドイッチを食べたがっていた。ある日の遠足前夜、私は遠足のお弁当は、サンドイッチがいいとせがんだ。しかし、食パンがない。母は、買いに行くのではなく、焼くことを選択した。一生懸命生地をこねる母の姿は、８歳の私にはとてもまぶしく見えた。

それ以来、私はラムネやグミなどのお菓子を自分で作るようになった。幸い、母は自家製の物が好きなので、材料はいくらでもあった。母からバトンを渡されて、作り始めた家族のためにバースデーケーキ。焼き小龍包やリゾットなど、好きな物は何でも作れるようになった。最近では、自家製コスメ作りに精を出している。子どもの頃、ラムネを作るために使っていた重曹とクエン酸は、新たに炭酸パックや入浴剤を作るために使うようになった。冬休みの期間には、鉱物でできたマイカパウダーで色のついたリップクリームやチークなどのコスメ作りに挑戦する。

お店に行けば、たくさんの商品が並んでいて、あれもこれも欲しくなってしまう。けれど、今は手をのばす前に「これは自分で作れないか？」と自問する。そんなことを頑張っている。

## ２－②　「見てから」

「もっとうまくなりたい」私が通っているダンス教室の同い年の子が、一人で踊っている姿を見て、思ったことだ。この瞬間、ダンスに対する思いが変わった。

私は５才の時から、ダンスを習っている。音楽に合わせながら、体を動かすことに楽しさを感じ、自分が楽しければそれでいいと、心のどこかで思っていた。だが、その考えは変わった。友達の踊り方は、見てくれている人を考えて踊っていた。素直に言って、とてもかっこよかった。私の踊り方は、見てくれている人を思ってなく、自己中心的だ。見てくれる人を楽しませることができないのは悔しく、友達に早く近づきたいと思った。それから私は、毎日のストレッチから始めた。ストレッチをすると、けがの防止になる。そして、踊る時の体を動かす範囲が大きくなり、踊りの振り付けを大きく見せることができる。次に、私は見てくれている相手を考えることを意識した。真顔で踊るより、笑顔で踊る方が、見ている方も楽しくなる。でも、まだ私は恥ずかしくなってしまい、笑顔で踊ることができていない。

最近では、ダンスの先生から、踊っている時生き生きしていると褒めていただくことがある。友達には，まだ近づけてはいないかも知れないけれど、これからも毎日続けて、周りを楽しませられるように頑張っていきたい。

## ２－③　「楽しい頑張り」

「あなたの選択は、大正解だったよ。」中学校に入学した手の部活は、何に入ろうか悩みに悩んで、

ソフトテニス部に入部を決めた自分自身に、今の私はこんな言葉をかけたいと思う。

正直、私の中学校にはそんなにたくさんの部活があるわけではない。だから、「そんなに悩んだの？」と思われてしまうかもしれないが、二人の姉が中学時代吹奏楽部に入っていたこともあり、なんとなく私も吹奏楽部かなと思ったこともあった。どちらかというと体を動かすことの方が好きだったこともあり、悩んだ結果ソフトテニス部に入部したのだ。そして中学２年生になった今、頑張っていることはソフトテニスだ。とても楽しくて、部の仲間達とプレーしている時が一番好きだ。中学校に入学して、初めて手にしたラケットに、不安がいっぱいだったが、たくさん練習して、前回の新人戦では、個人や団体で県大会に行けるまでになった。それでも、もっともっとチームとして強くなりたい。どんなに寒い日の練習も、全く嫌だとは思わない。好きになる、夢中になるってすごいことだ。頑張っているけれど、とても楽しい頑張りだ。

これから先の私も、色々悩んだり苦しんだりするだろう。どんな時でも自分の出し答えに、自信を持って、自分を信じて行動していける人でありたい。頑張ることが楽しい毎日を過ごしたい。

## ＜中学校３年生＞　作文課題「ジェンダーフリーを実現するためには」

### ３－①　「みんな違ってみんないい」

「男の子はブルー、女の子はピンクを好む」このような「男だから」「女だから」という思い込みは間違っている。「男だから」「女だから」という思い込みによって、差別や偏見を強めることに繋がってしまっていることが世の中の現状である。

色や趣味、言葉、仕事内容で男か女かを判断することは、固定観念によるものである。男の人でもピンクが好きであったり、女の人でも青が好きであったりする。人それぞれ男女関係なく、好きなものには必ず違いがある。私は過去にジェンダーに関する本を読んだ時、赤と青の帽子があり、赤の帽

子が欲しかった男の子が、青の帽子を買わされてしまった話を見つけた。私自身も似たような経験がある。ジェンダーフリーを実現するためには、まず最初に固定観念を捨てることから始まると考える。固定観念に囚われずに考えることができれば、差別や偏見が減るだろう。しかし、固定観念を捨てるだけで差別や偏見はなくならない。一人ひとりが相手のことを理解し、受け入れ、尊重する努力をすることが大切であると考える。一人ひとりが意識を高めていくことで、次第にジェンダーフリーの実現に近づいていくだろう。

私達人間には、一人ひとり違った個性がある。誰一人として同じ人間はいない。狭い視野でなく、広い視野を持って人と接し、「みんな違って、みんないい」という考え方をすることが重要である。

## ３－②　「ジェンダーフリー」

ジェンダーフリーを実現させるためには、まず「男女だから」といった考え方をなくすことが大切だと思います。

私自身、中学校に入ってから、性別による期待や決まりが、まだまだあることに気づきました。例えば、文化祭の応援団やクラス委員の選ばれ方が、男子と女子で違ったり、体育や技術の授業では男子が得意だと思われたりしていました。こうしたことが、無意識のうちに「男子だから」「女子だから」といった枠に縛られているのだと感じました。ジェンダーフリーを実現するために、先ず家庭や学校で性別関係なく、様々なことを経験させることが大切だと思います。例えば、男子が料理をしてみたり、女子が体育で活躍したりすることは、性別関係なく自分の得意なことを見つけるきっかけになります。

また、進路指導や職業選びにおいても、性別関係なく様々な選択肢を提示し、自由に選べる環境を整えることが大事だと思います。家庭でも、性別による役割分担をなくすべきです。私の家では、父

も料理を作ったり掃除をしたりしています。これが当たり前になることで、色々な役割を担える社会がつくられるのではないでしょうか。更に、メディアや広告にも影響を与える必要があります。

私達一人ひとりが、性別に関係なく自分らしい選択ができるように意識を変えていくことが、ジェンダーフリー社会の実現に繋がると考えます。

## ３－③　「一人ひとりの個性を大切に」

今、世界でジェンダーバイアスが注目され、ＳＤＧｓの活動の一つにも取り入れられている。性別による偏見や固定観念は、多くの人々が持ってしまっているものである。

中学生になってから、可愛い女の子が着るような服より、どちらかというと男の子が着るようなデザインのものを好むようになった。ある日、新しく買った服を着てテーマパークに行った。アトラクションに乗ろうとした時、周囲から嫌な視線を感じた。きっと、私が男の子のような服を着ていたからなのだろう。女の子が何故そんな服を着ているの？と自分を否定されているようで、とても嫌な気持ちになった。だが、私にも気をつけていても男女で分けてしまうことがある。ジェンダーフリーを呼びかけるコマーシャルがあった。音声無しで映っている言葉を見て、男性か女性か、どちらが言っている場面を想像するか、というものだった。これを見たことで、私にも偏見や固定観念があることに気づいた。

ジェンダーフリーを実現するためには、性別にとらわれず、一人ひとりの内面や能力などを評価し、それぞれの個性を大切にするべきだと考える。根付いてしまった偏見や固定観念を全てなくそうとすることは、難しいかもしれない。だが、その人らしさを尊重することはできるはずだ。私自身も、自分に自信を持って生きていきたい。

## ３－④　「区別から差別へ」

最近ＳＮＳで、一見男か女か分からない人、女に見えるが男の声を持つ人などを多く見かけるようになった。その中に、私の好きなグループがいる。そのグループは、ＬＧＢＴＱの人や外国で生まれた人がいて、「こんな私達でも活躍できて、誰かの役に立てることを伝えたくて活動を始めた」と言っていた。

十人十色という言葉があるように、人は全員違っている。私の好きなグループは、そのことを面白い会話などで伝えてくれている。しかし、動画のコメントの中に、「〇〇さんは、男なの？女なの？」「〇〇さんの恋愛対象は、男？女？」などというものが多く見られる。なぜ男・女という区別をしたがるのか。私には理解しがたい。私の好きなグループの人達は、男女差別をなくすために活動しているのに、意味はあるのだろうかと考えてしまう。なぜ、人は差別をしたがるのか。それは自分と違う人だと分ければ、安心できるからだ。男か女か分からない。何をしてくるか分からない。そう本能で感じているのだろう。だから、区別をする。そうすれば、自分と違う生き物だから、安全になり、安心する。しかし、ＬＧＢＴＱなどの人達は、当たり前だが何もしてこない。だから、区別から差別に変わる。

差別は、個人の意志で行われる。私一人が努力したところで、世界から差別はなくならない。しかし、自分の意志は自分で決める。人を差別しないよう心がけたい。

## ３－⑤　「性別にとらわれない世間のために」

「女の子なんだから家事の手伝いくらいしなさい。」何度も母に言われている言葉の一つだ。言われる度に、男子なら家事をしなくていいのかと言い返したくなる。

日本は、世界の中でもそれぞれの性別に対する偏見が強い国だ。冒頭の言葉も、「家事は女子がするもの」という偏見によるものだ。性別による偏見は、日常生活の中で多く見られる。例えば、「男なんだから我慢しろ」という言葉をたまに耳にする。「男は色々なことを我慢するべき」という偏見

が含まれた言葉だ。他にも、父親が育休を取りづらかったり、母が育児のために就職しづらかったりすることがある。普段から性別による偏見が数多くあっていいのだろうか。　偏見の原因は、人々の無意識の思い込みや決めつけだ。「男子だから」「女子だから」という固定概念が、ＬＧＢＴＱへの差別を生んだり、成長やキャリアに悪影響を及ぼしたりすることがある。性別による偏見を誰でも持ってしまうからこそ、私達の性別に対する認識を一度見直さなければならない。しかし、いきなり偏見を全く持たないということは難しいだろう。なぜなら、偏見は無意識のうちに生じてしまうからだ。

だから、まずは自分自身に思い込みや決めつけがないか、自己認識を深めてみてはどうだろう。少しずつでも性別への認識を改めていけば、相手を性別に関係なく評価できるようになるはずだ。いつか全員が同じ立場で評価される世間になって欲しい。

## ３－⑥　「女性への気づかいを」

「男の子なんだから泣かないの」「女の子なんだからスカートにしようね」最近はそんな声をあまり耳にしなくなった。性別による固定概念は年々薄れていっているが今では、男性と女性での給料や出生率が、社会で大きな問題となっている。

以前、母との会話で「一般的に女性の方が給料は少ないよ」と言われたことがある。同時に入社した男女２人が、同じ仕事を始めても、給料の開きがじわりと出てきて、結果、男性の方が多く支給されている会社が多いと聞く。私は、なぜ性別が違うだけでこんなにも大きく変わるのか、女性は世間から期待されていないのか疑問を持った。それは、女性は出産や育児などを理由に働くことを中断するか諦めなければならないからだと思う。男性に比べて、そうせざるを得ない理由が多く、会社からも「いずれ結婚し出産したらやめる」と思われやすいのだ。

しかし、これでは有能な人材を埋もれさせてしまうだけだ。私は女性が育児休暇から復帰しやすい環境を会社が作り、誰が休んでもフォローし合えるチームワークが大切だと思った。例えば自分や子

どもが体調不良の時に、自宅でも仕事ができる在宅勤務が可能になるといい。育児休暇や体調不良で休むことへの罪悪感がなくなることがとても大切だ。大企業では、様々な制度が整いつつあるが、それが小規模な職場でも広がっていくことを願う。

## ３－⑦　「一人ひとりの意識」

「女子なんだから、家の手伝いくらいしなよ。」今回の作文の課題を見て、思い出した言葉だ。確かに私は、家の手伝いをしていない。でも、「女子なんだから」をつける必要はないだろうと思った。

ある日、母が夜ご飯の準備をしていた。それを兄と弟が手伝っていて、自分はスマホを見ていた。しばらくしたら兄が、「俺はもう運ばないから。」と言い、自分の椅子に座った。その後は、弟が一人で手伝っていた。それを見た兄が、私に向かって「手伝えよ。」と言った。その後には「女子なんだから。」や「将来どうすんの？」など、色々言ってきた。「今の時代、そういうの関係ないんだよ。」と返したら、けんかになった。結局、母に怒られて終わった。このことから、昔に染みついた差別的意識は、なかなか変えられないものなのだなと考えた。それは、兄だけではない。自分みたいに差別的発言を受けて傷ついている人が、世の中にはまだたくさんいるのではないかと考えた。

そこで今、日本はどのくらいジェンダーフリーが進んでいるのかを調べてみた。なんと日本は、ほぼ最下位といっていいほど進んでいないことが分かった。この結果から、ジェンダーフリーが進まない原因として、一人ひとりの意識が変わっていないということが上がるのではないかと考えた。自分の身近な人達にも伝えていきたいと、心から思った。

## ３－⑧　「相手への尊重の意」

「ジェンダーレス」この言葉、誰もが聞いたことのある言葉だろう。ジェンダーレスとは、従来の女性観や男性観にとらわれないことを意味する。

私のいとこは救急救命士の仕事をしている。これを見てみなさんは男性、女性どちらを頭に思い浮かべるだろうか。男性と答える人が多いと思うが、いとこは女性である。実際本人に男女比を聞いてみると、男性五十人に対して女性は三、四人しかいないと言っていた。こういった職業は、男性の方が力があり役に立つと思われがちだが、いつでも冷静さを保ち、聞き手の立場になれるような女性もいなくてはならないと、私は個人的に感じている。職業だけにかかわらず、たくさんの場面でジェンダーは関係している。男の子だから青色の服、女の子だからピンク色の服。男の子だからズボン、女の子だからスカートなど。人には、自由に生きることのできる自由権が法律で定められている。自分のしたいようにし、好きな物を選んで着ることができる。今この世の中にある固定概念にとらわれることなく、一人ひとりが持っている個性を光らせるべきだと思う。

その人ならではの個性を出していくには、周囲の人が本人の好きなもの、興味のあるものを尊重することが大切だと思う。何事にも一生懸命な人に、否定から入るのではなく、「これもこの人の個性だ」と受け入れられる心を持つことが、この世の中で重要なことだと思う。

## ３－⑨　「『ジェンダー』選べる自由」

最近では、よくニュースで「ジェンダー」や「ＬＧＢＴＱ」などの言葉を聞くようになりました。そこで、私の体験や聞いたことから、考えたことが２つ頭に浮かびました。

一つ目は、ある中学校で男女がどちらの制服も選べるようになったことについてです。私の中学校でも、そうなっています。その、ある中学校では、制服を自由に選べる理由として、「ＬＧＢＴＱの生徒に配慮して」を挙げたようです。しかし、それが原因で男子も女子も、もし選んだらＬＧＢＴＱだと思われるという考え方になってしまいました。結果、以前とは全く変わらなかったようです。この学校はＬＧＢＴＱに配慮しようとして特別感を出してしまったのが、問題だと思いました。特別感

をなくすことがジェンダーフリーのために必要だと思いました。

二つ目は、私が以前通っていたサッカー教室のコーチの誘いで、フットサルの試合に行きました。その大会では、男性以外にも子どもや女性も参加できる大会でした。その大会では、女性と子どもの得点が２点になるというルールがあったのですが、女性や子どもが参加しやすくなるように、必要なルールだと思いました。

このことから私は、ジェンダーフリーを実現するためには、ＬＧＢＴＱを否定せず特別感を持たせすに、通常通りに接することが大切だと思いました。男女で差があることは、調整することが必要だと思いました。

## ３－⑩　「性別の壁を越えるには」

「女の子なのにすごいじゃん。」私が生徒会長と知ると、必ずと言っていいほどこの反応が返ってくる。かつては、生徒会長＝男がやるものだったのかもしれないが、私にとって生徒会長をするという選択は特別なことではなかった。そこには親の教えの影響が大きかったと思う。

私の両親は「男なら、女ならこうあるべき」とか「お兄ちゃんだから、お姉ちゃんだから」とは私達兄弟に言うことはなかった。男女の性差による得手不得手で役割を変えるべきではない、と教えられてきた。だから、「イクメン」という言葉が流行り、育児に積極的に参加する父親は素晴らしいと、もてはやされていることに対して腑に落ちない。なぜ男性は育児をするだけで称賛されるのか理解できない。「イクメン」という言葉は、女性いわゆる母親が育児をすることが前提と考えられているから出来た造語だ。こんな造語ができること自体、日本では性別での役割分担意識が、未だに根深く残っている証拠だ。

昔から根付いている見方を取り払い、性別にとらわれない社会にする必要がある。例えば制服。女子もスラックスを選択できる学校が増えてきた。このような取り組みは、男女差にとらわれない考え

方を根付かせるきっかけになるだろう。自分の言動により、性別の狭間で苦しむ人を作っていないか、固定概念にとらわれていないか見つめ直していきたい。

## ３－⑪　「ジェンダー平等を実現するために必要なこと」

ジェンダー平等を実現するために必要なことは、教育・政策・意識改革の３つが必要だと思います。

まず、教育の重要性です。性別に関係なく、平等な教育機会を提供することが、将来的なジェンダー平等の基盤を築くとされています。特に、女児の教育を推進し、ＳＴＥＭ分野への参加を促すことで、女性が様々な職業に進出する道を開くことができます。また、学校教育において、性別に関する偏見やステレオタイプを取り除くカリキュラムを導入することが重要だと思います。

次に、政策面での取り組みです。政府や企業はジェンダー平等を促進するための明確な政策を制定し、実施することが必要です。例えば、男女同一賃金の実現、育児休暇制度の充実、働き方改革を進めることで職場における平等を推進することができます。また、女性のリーダーシップを支援するためにプログラムを設け、女性が意志決定に関与できる環境を整えることも重要です。

最後に意識改革です。社会全体で、ジェンダーに関する意識を高めるには、メディアやコミュニティが積極的に情報発信を行い、ジェンダー平等の重要性を広げるべきだと思います。

これらの取り組みを通じて、ジェンダー平等の実現に向けた確かな一歩を、踏み出すことができるでしょう。全ての人が平等に扱われる社会を目指して、共に行動していくことが大切だと、私は思います。

## ３－⑫　「誰もが社会で活躍するために」

人は誰でも、人として尊重され、それぞれにふさわしい環境の下で人間らしく生きる権利を持っている。これは男性であろうと女性であろうと、全ての人に与えられた権利だ。

曾祖母の時代は、「男は仕事に出て、女は家庭を守る」「男を台所に立たせるような、みっともないことをしてはいけない」というのが主流だったと聞いたことがある。「女に学問は必要ない」と言われ、進学を諦めたことを長年後悔している女性も多かったようだ。女性は、出産育児をし家事をこなすことが美徳という考えが、日本にはあったのだろう。しかし、現代では女性は男性に劣らず、社会に出て重要な仕事をこなしている。その結果、女性の負担が大きくなっている。母も、毎日仕事から帰宅し、家事に追われて大変そうだ。それに対し多くの男性は、自分がやらなくても、家の中の誰かがやってくれると思っているのではないだろうか。

母が行うのが当たり前だと思っていた家事だが、最近は私も洗濯や玄関掃除等のできることを始めている。男女には、それぞれ持っている特性がある。女性が男性と同じように社会で活躍するためには、家事を分担し互いに尊重し合いながらも、男性も一人の人間として、もっと家事を見直し率先すべきだ。皆が他人事と思わず、関わっている一人の人間として、真剣に考え行動することで、男女平等な社会に近づくことができるはずだ。

## ３－⑬　「思い込みを正して平等な社会を創る」

「母親も単身赴任をするのか」近所に母親が単身赴任している家族が住んでいることを知り、そう思った。これは、ジェンダーバイアスである。

父は私が保育園に通っている頃から、単身赴任をしていた。そのため、単身赴任という働き方を選択するのは、父親だと思いこんでいた。母親が単身赴任だと聞いた時は驚いた。それと同時に、母親がいない中、家事や育児はどうしているのだろうと思った。今思えば、恐らく父親や子どもが行っているのだろう。しかし、父親がずっと単身赴任だったために、母親が家事や育児などのほとんどを担っていた。それを見てきた私は、家事や育児は、母親がすることだと思いこんでいた。

ジェンダーバイアスは、自分の周りの環境や社会の風習が影響していると思う。幼い頃から父親が

単身赴任をして、母親が家事や育児をしている中で育ってきたため、「男性は仕事」「女性は家事・育児」という思い込みが生まれてしまった。また現代でも、昔に比べれば減ったものの、男は仕事だ、女は家事育児だという考え方が残っている。

　ジェンダーフリーを実現させるためには、積極的に学校や家庭で教育することが大切である。男だから、女だからという性差による差別をしてはいけない、ということを伝えなければならない。男女共に平等で、皆が安心して暮らせる社会が作られることを願っている。